

きぬさやえんどうの安定生産に係る調査研究

中島農業研究会
代表 道見 拓也

1. 調査研究の目的

高収益作物であるきぬさやえんどうの栽培には、干ばつや高温障害により品質や収量が低下するといった課題があり、播種日をずらした栽培や減肥減農薬による生育収量調査等を行い、栽培技術の向上を図ることで安定生産を実現し、収益性アップを目指す。

2. 調査研究の方法・内容

○品種

絹子町（収量があり、病気に強い品種）

○栽培概要

栽培面積	播種日	畦幅	収穫開始日	収量 (kg/10a)
20a×2 10a	4/25	密植栽培 132cm×18cm	6/25	1271
	5/15		7/15	610
	5/25		7/20	151

施用量 (kg/10a)			防除	
土改資材	肥料	追肥 (開花期)	収穫開始後 2週間	収穫開始後 4週間
生石灰 100	農配合時用 50	液肥花果神 (1本72g)を 1,000ℓに希釈	アディオン 乳剤	モスピラン 顆粒水和剤

※昨年との変更点は三回に播種を分け堆肥散布も1、5 t / 10a 行っています。収穫後は緑肥を作付けしています。

3. 調査研究の結果

春先から天候に恵まれ生育は順調に進み4/24播種は過去最高の収量に恵まれました。しかしながら7月後半からの猛暑で5/15.5/20播種のものが花付きが悪くガク枯れ、花落ちが多発し、早期にきぬさや全体も枯れてしまい収量が4/25播種のものに比べて極端に落ちる結果となりました。

一方で、猛暑の影響で病害虫は少なく、病気の発生もあまり見られず、全体を見れば品質は良く、収量は平均より大幅に上回る結果になりました。

また、管理作業では追肥や防除回数を少なくでき、労力軽減できたことは昨年に続き収穫でした。

	種子量 (kg/10a)	窒素成分量 (kg/10a)	農薬成分 使用回数	収穫量 (kg/10a)
慣行栽培	3	13	11	420
調査研究	6	6	5	812

4. 今後の課題と方策

環境保全型農業に取り組み、化学肥料・化学合成農薬の5割低減を実施していくと同時に栽培技術をより一層向上させ収量増を目指す。具体的には、堆肥散布や緑肥作物のより一層の導入を検討している。次年度は播種時期を暑さ対策として早め、土壌改良資材のより一層の導入や肥料の低減による比較調査を行っていく。その他次年度は今年できなかった道内他産地の視察や勉強会の開催を行っていききたい。

きぬさやえんどうは干ばつに弱く、病気にも弱い作物であるため、高温、干ばつの年に備えかん水対策が今後必要になってくると思われる。リールマシンやスプリンクラーの導入を今後本格的に考えていく必要があると思われる。

きぬさやえんどう収穫には多大な人手が必要であり、人材の確保が課題であるため、高収益作物ではあるが作付けがなかなか増えない原因の一つとなっている。一大産地である大正産きぬさやえんどうを他生産者とともに連携しあって広めていく対策、人材確保の対策についても検討していききたいと思っています。

4/25播種 生育順調な様子 品質も良



5/15播種 ガク枯れ多発の様子



5/25播種早期に枯れる様子

